

---

# **らき すた 我が家に大集合! ? ~もしもの世界~**

十波 悠真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

らき すた 我が家に大集合！？ もしもの世界

### 【Zコード】

Z2341F

### 【作者名】

十波 悠真

### 【あらすじ】

これはタイトル通りもう一つの作品、“らき すた 我が家に大集合！？”のもじこりうだつたらといづ世界……。

——もしこなたが恋人だつたら——

トクトクトク…。

シユワー…。

くいっ…。

ゴクゴク…。

ふー。

やつぱり朝は「ーラに限るなあ…。

——ピンポン。

「……？」

いつたい誰だ？

コーラを手に持ったまま玄関まで行く。  
するとドア越しから明るい声を受ける。

「おーい椿君ーーー」

この声は…。

いつもは時間ギリギリに鳴るはずのインター ホンが二十分前に押されるここに疑問を抱いたがとりあえず出るか。  
ドアを開ければ日差しと同時にこなたのほほんとした顔が目覚めの朝を示していた。

「おっはよ、椿君」

「おう、今日はやけに早いな」

雪でも降るんじゃないかと一瞬考えてしまったのは失礼だろ？

「むー、なにその雨でも降るんじゃないかって表情は」

「べ、別にそんなは顔してないだる。　んで？　今日は何でそん

な早いんだ？」

ちょっとずれたが確信を突かれたのを隠すようにこなたの意図を聞いておく。

ま、どうせなんとなくとか言いそうなんだが。

「えーっとね…椿君に一秒でも早く会いたかったから…」

「ぶつ！？」

臭いセリフを堂々と言つので思わずコーラを吐いてしまつ。

「冗談だつてば　ね、早く行！」

口、口ノヤロー…！

後で覚えてろよ…！

「あー…、あまりのサプライズだったんでこっちの用意ができるないんだ。

すぐ着替えてくるから少し待つてくれ」

残ったコーラを飲みほして俺はリビングに行こうとする。

「んじゃ私も着替え手伝つてあげるね」

「ちょっと待つた！」

俺はこなたが靴を脱いであがるつとするのを引き止める。

「えーっ、なんでー？私達付き合つてるんだよー？」

そういう問題じやないだろ。

「一人でやつたほうが早いんだよ。だからこいでーー」

「ズボンのチャックは私がしてあげるからわ

「なあさら駄目だろ！」

「といひでや、昨日のアニメ見た？」

す「じく面白かったよねー」

緩い声でいつも通りに俺の彼女は話す。

だが彼女といつても付き合つてまだ一週間しかたつていない。

七月になって俺から告白したのだが

情けないことに俺は人生で始めて付き合つので最初は多少ギクシャクしていた。

でもこなたと話すときはとても面白くて今ではいつも何気無い会話が俺の一日で一番の楽しみになっている。

まあ話すことと言つたら七割がアニメなんだが俺も好きだから飽きはしないんだけどね。

そして残りの三割は他愛もない普通の世間話だ。

好きな奴と一緒にいられてこんな毎日を過ぐせることは幸せなことだろう。

少なくとも俺はそう思つ……。

しかしこなたと付き合つには多少のリスクが生じてしまつ。

例えばこなたの外見だ。

こんななりでも一応高校二年生なのだが、初めて手を繋いで街中を歩いていた時口うるさいやう子供好きと陰でボソボソと言われている。

そしてその日には警察に通報されたこともあったなあ……。

あのあとどれだけ誤解を解くのに必死だつたか……。

学校でも噂になつて氣まずいつたらありやしない。

でもこなたの笑顔を見たらそんなのどうでもよくなる……。

一番大切なものがそこにあるからなのかな……。

「ねえねえ椿君」

「ん?なんだ?」

「ワガママ言つていいかな」

「……」

またこいつは唐突に……。

いたずらっぽい顔をしているのが気になるが、まあ聞くだけ聞いてみよう。

「……なに?」

「キスしよ」

無理です。

「付き合つてるんだからキスぐらいはいいよね?」

こなたは顔を覗きこんでくる。

「い、いや、それはちょっと……」

道のど真ん中ではさすがにできないのでこなたが文句を言ひのを覚悟して拒んだ。

しかし、

「……」

「……」

あれ? 何も言わない。

こなたはうつ向いたまま歩く。

そして上目使いから、

「椿君は……、キスしたくないの?」

攻撃力MAXの言葉で攻めてくる。

「う……それは……」

言葉に詰まる。

し、正直言つとこなたとはキスしたい。

でもなんか恥ずかしい

キスつてどうやるかわかんないし……。

一つてそんなんだから俺はいつまで経つても……。

こなたの緑の瞳に涙が見えた。

こ……、こうなつたらやるしか……！

俺は強引にキスの形にもつてこいつとするが、

「やつぱりやめた」

「……なつ…?」

ひょいとかわされたあとにこなたは一歩前に出る。

「こんなに彼氏が困つてゐるのに無理矢理させるのはやつぱり違う気がする…。

ファーストキスは椿君がしたいときにするよ」

笑つているように見えるがこなたの肩は震えていた。

それが何故かはわかつていた。

なにも俺だけがビビつてるわけじやないんだ。

こなただつてやつきのことを言つたためにどれだけの勇気を必要だつたか…。

“断られたらどうしよう…”

“こんなこと言つて嫌われないかな…”

そんな感情がこなたの頭では渦巻いていたるつ…。

……本当に俺は情けないよ…。

ただ優しいだけのダメ人間だ…。

だから……変わらないとな…。

静かにこなたに近づいて俺は抱く。

こなたの顔が俺の胸に埋まる。

息がかかる零距離になつて今こなたが顔をあげたら相当恥ずかしい状況になつてしまつ…。

でも今ならいい感じでいける気がする…。

「……つ、椿君……？」

だんだんとこなたの眼がアップしていき、そつと優しく頬にキスをする。

「……へ？」

唇を離してこなたの顔を見ると呆気にとらっていた。

そんな様子を見て俺は今頃自分がしたことを恥じて慌てて距離をとった。

甘酸っぱい雰囲気が空気を彩る。

「え、えと……、ゆ、勇氣がでるまでさ……これで我慢してくれないかな……？」

「……椿君」

あ……やばい……。

顔が真っ赤になつたのが自分でもわかり、俺はふいつと顔を背ける。こんな赤くなつた顔を見られたくなつた。

沈黙の一拍が発しているとこなたは腰に手を回して抱き返す。

「い、こなた……？」

返答はなくこなたはそのまま顔を近づけて……。

——チユツ。

こなたの唇が左頬に触れる。

「……は？」

予想外のカウンターに俺は一人で漠然としていた。

「椿君も今はこれで我慢してよね」

こなたは先に走り出して振り返る。

早く行かないとい遲刻しちゃうよー

あ、あんにゅー！

俺は小さな背中を追いかける。

弱そうに見えるその体を守つてやりたい。

やしきあいと一緒に歩こうと思ったい……。

それが今の夢なんだ……。

——「とにかくこんな田々が続きますよ」——

ſinſ

## もしかがみがオタクだったり

「こなたー、今から本屋寄らない？」

帰りの支度をしていると隣のクラスのががみが「一七一」しながら教室に入ってくる。

「か、かがみまた行くの…？」

昨日行つたばつかなのでお金が少しばかりピンチのこなた。

「チェックよチェック。なんか新刊が出てるかもしないじゃない」「けど2日続けて行つてもあんまり意味ない気が…」

引っ込み気味のこなただがかがみはそんなことお構い無しだった。

「いいからいいから　じゃ早く行きましょ。

あ、椿君も来る？」

かがみはこなたの横の席にいる椿君も誘つ。

「俺は財布空っぽだよ…」

椿君は財布を逆さにしながら言つ。

そういうえば昨日椿君は本屋に寄つたあとでかがみにゲーセンとかに付き合つてたんだつけ…。

「ふーん、それじゃ仕方ないわね…」

みゆきもつかさも用事があるって言つてたし「一人で行くか…」。

「でもかがみ実は“こなたと二人きりで嬉しい”とか思つてたりするんじゃないの？」

こなたはからかうよひ一マーマー顔で言つ。

「ち、違うわよ… 別にそんなこと考えてないんだからねー…」

「ふーん(ニヤニヤ)？」

「ほ、ほり、やつやと行かないと帰るのおそらくなっちゃうじやない

！」

かがみは先に教室を出る。こなたもそれに続ぐよつて教室から姿を消した。

「あ、このフイギュア可愛いー！」

こなたは店頭に並ぶフイギュアの一つに注目する。

「ホントだー。特に犬耳にスク水着てて銃を撃つてるとなんか萌えるわよねー」

確かに萌えるポイントはかがみの言つ通りでこのフイギュアのアニメは個人的にとても好きだ。

けどお金が足りないなー…。

こなたは値札を見ると頭をガクッと落とす。  
やつぱり無理だ…。

諦めるしかない…。

「よし、私買っちゃおつと

……えつ？

普通に言つかがみにこなたは絶句した。

かがみは店員に頼んで同じフイギュアを奥から取つてしまひう。

「こちらでよろしくでしようか？」

「はい」

「えー、7800円になります」

か、買つちゃうんだかがみ…。

バイトしてないのに大丈夫なのかな…。

こなたはハラハラしていると、店員はオタクの心を搖することを言う。

「あ、この商品は限定版と通常版のフイギュアがありますがどうなさこますか？」

でたな“限定版”。

オタクなら必ず“限定”といふ言葉に反応を示す。

「え…、どうしよ……」

やはりかがみは一つの商品を前にして悩む。  
かがみはいつたいどちらを選ぶか…。

オタクなら限定版を買うのだろうが値段は12500円、とても簡単に手がつけられる代物じゃない。

ならかがみはやつぱり…。

「じゃあどちらもお願ひします」

ふおつ！？ どっちも買つちゃうの…？ それじゃ一般的なオタク  
越えちゃってるよ…？

かがみの大胆な決断にこなたはあんぐりと口を開けていた。  
かがみはそのうちにちやつちやと会計をすませてきた。

「ん？ こなたどうしたの？ そんなぽかんとして」  
そりやびっくりするでしょ……。

「おやおや～？ やっぱりシンナーは健在ですか～」

「シンナー言つたな～」

私もオタクだからシンナーといつ言葉は理解できる。  
簡単に言うと私みたいな人を言つのだろ?。

でも言いたいことが言えない分、辛いだけなのにな……。

「また今度も行こうね、かがみん」

「ドクン…。

こなたの笑顔でかがみの心が動く。

あんな顔で言われたらどうしようもないじゃなし…。

けどこなただつて受験忙しいのにここまで来てくれたんだから少し  
くらい素直にならないとダメよね…。

「ま、また暇な時があつたらね。

それから

かがみはちゅうと俯き、赤くなつた顔で、

「今日付き合つてくれてありがと…」

かがみはボソッと礼を言つたあとすぐには流れる外の景色を映す。

「え？ かがみ、今なんて言つたの？」

こなたは小さい声でよく聞こえてなかつたらしい。

「な、何でもないわよ…」

「ふーん、まあいいや」

あくまでマイペースなこなた。

はあ…。

やっぱりこなたが相手だと素直になれない…。

それは私がこなたのことを変えに意識してるから…？

「また来ようね

いつかそれがあいつに言へたらいいな……。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2341f/>

---

らき すた 我が家に大集合! ? ~もしもの世界~

2011年8月9日19時17分発行